



SDGs を価値から考える

神戸大学 経済経営研究所

教授 西谷 公孝

SDGs（持続可能な開発目標）という言葉聞いたことはあるだろうか。SDGs とは、2015年に国連で採択された持続可能な社会を目指した17の目標とそれらに付随する169のターゲットから構成されている国際目標のことである。2030年までの15年間で達成することが求められている。

特にここ1、2年で社会にも浸透してきており、街中ではSDGsがラッピングされた電車やバス、さらにはSDGsの17色のバッジを付けたビジネスマンを見かけることが当たり前になってきたし、SDGs関連の書籍なども増えてきた。また、大学に目を向けても、大学自体がどうSDGsに取り組んでいくかということも議論されるようになってきた。もちろん神戸大学もご多分に洩れない。

社会環境問題が叫ばれるようになってからかなりの年月が経つが未だにそれが解決されたとは言い難い。それゆえにSDGsが誕生したのだが、SDGsの名のもとにこれまでと同じような対応をしているだけでは、社会環境問題は解決できないだろう。そこで、本コラムでは、価値の観点からSDGsを考えて、その仕組みを明らかにし、その達成に向けた望ましい取り組みの方向性を提示する。

SDGsの第一義的な目的は社会環境問題の解決である。しかし、SDGsのSDとは「持続可能な開発（もしくは持続可能な発展）」を意味しており、実はそれだけに焦点を当てたものではない。「持続可能な開発」とは、1987年に国連の環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）がその報告書の中で取り上げたことに端を発しており、その時点では、社会環境を犠牲にしない範囲で経済発展も図ろうというものだった。しかし、その後「トリプルボトムライン」という概念が出てきてそれがサステナビリティ報告書のガイドラインである「GRIガイドライン」に反映されたことが発端となり、経済・環境・社会の調和が不可欠であるとの機運が高まった。その結果、SDGsは、社会・環境・経済の両立を根幹として、社会・環境・経済全体のパイを将来にわたって大きくしていくことを目指した開発というふう捉えられている。つまり、SDGsは単に社会環境問題の解決だけを目指したものではない。

SDGs達成のための特に重要なキープレーヤーになるのが企業だが、企業は営利団体であるために、社会・環境・経済の両立という考え方は企業にとっても取っ付きやすいものである。従って、企業は、社会的責任（CSR: corporate social responsibility）の観点を持ち

つつ、自社の利益（経済価値）と社会環境問題の解決（社会環境価値）のバランスをうまく取りながら SDGs に取り組むことになる。そして、社会全体が企業の経済活動に依存するほど企業におけるバランスが社会全体のバランスに近づいていくはずである。

こうした社会・環境・経済の両立の考え方は、例えば、ハーバードビジネススクール教授のマイケル・ポーターらが提唱した「共通価値の創造（CSV: creating shared value）」にも通じている。CSV は、本業を通して社会に貢献しつつ企業の利益の追求（すなわち、社会環境価値と経済価値の win-win な関係）も狙うところにその特徴がある。それゆえに、社会環境価値と経済価値が win-win となるから、SDGs に取り組むことは企業にとってビジネスチャンスであると考えられる有識者もいる。

一見、この社会環境価値と経済価値が win-win な関係になるという考え方は、社会環境問題の解決、ひいては SDGs の達成にとって非常に有効に見える。しかし、もしそれが本当に有効ならば、SDGs が出てくる前に社会環境問題はとっくに解決しているはずである。つまり、こうした考えだけでは SDGs の達成には不十分であるということである。これは、社会環境価値と経済価値には win-win な関係が成立していないからというよりは、win-win な関係が限定的に留まっているからと考えられる。言い換えると、部分最適にはなっていないでも全体最適にはなっていないのである。もちろん、社会環境価値と経済価値に win-win な関係が成立する社会環境問題には、そうしたアプローチで臨む方が効率的なので、そうすべきある。実際、SDGs の根本的な考え方はこれに沿っている。問題なのはそうならない場合であるが、これまで十分に議論されてこなかった。では、なぜそうならないのだろうか。

先述した社会環境価値と経済価値のバランスがこれを理解するカギになる。もともと相対するものだと認識されていた社会環境価値と経済価値のバランスがとれるということは、社会環境価値と経済価値には相互補完的かつ相対的な関係があると言える。相互補完的だけならば、社会環境価値か経済価値かではなくそれらの全体の価値が重要になってくるが、かつ相対的でもあるので、実態の社会環境価値と経済価値は全体の価値に占めるそれぞれの価値ということになる。

社会環境問題が解決しないのは、理想とする社会環境価値と、こうした関係から実態として評価されている社会環境価値にズレがあるからで、現在の状況がまさにそれだと言える。どれだけ社会環境問題を解決しようと言っても、構造上、全体の価値に占める経済価値への依存度が高いほどそうはなりにくいのである。これは人間が経済活動なしには生活できないことから起こるジレンマである。従って、社会環境価値と経済価値が常に均等になるとは限らないことが、win-win な関係だけでは社会環境問題が解決しない理由となる。

以上のように、SDGs を価値から考えると、社会環境問題が置かれている現状と、その仕組みを可視化することが出来る。その結果、SDGs 達成にボトルネックとなっているのは、社会環境価値と経済価値が win-win な関係にならない課題であり、それを補完する新たな取り組みが必要であることが明らかとなった。つまり、そうした課題にこそ目を向けて重点的に取り組まなければ SDGs 達成は難しいのである。

本コラムでは、SDGs 達成のための取り組みの望ましい方向性を提示するところで留め

ておくが、経済価値を犠牲にして社会環境価値を重視する取り組みを推奨しているわけではない。SDGs はそんなことを求めているし、営利団体である企業がそのようなことをしても長続きはしないからである。そんな中、國部・西谷他（2019）では、「無限責任の考え方に基づき、社員による主体的な活動を奨励して、創発的な実践を生み出す経営」である「創発型責任経営」を提唱し、その観点から SDGs に取り組むことが有効であることを指摘している。責任は無限であること（なお、企業の経済活動の責任は有限である）、企業ではなく社員が主体的に活動する点において、「創発型責任経営」は、社会環境価値と経済価値の相互補完的かつ相対的な関係から独立した概念と言えることから、win-win な関係を補完する取り組みとしても期待される。「創発型責任経営」の詳細やその他の SDGs 達成に向けた望ましい取り組みについては、改めて書ければと思う。

参考文献

國部克彦・西谷公孝・北田皓嗣・安藤光展（2019）『創発型責任経営－新しいつながりの経営モデル－』日本経済新聞出版社。